
Memory of Haruka or the far past

天野音色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Memory of Haruka or the far past

【Nコード】

N9504F

【作者名】

天野音色

【あらすじ】

僕。は、友人ラスティの話を、まるで共犯者のように、聞き続けていた。それは、遠い過去に存在した文明についての、記憶……。そう、彼はそれを、アトランティスだと、そう言っていた。だがラスティはある日、突然姿を、消す。僕はそして彼に、信じられない場所で、再会を果たす。それは……………。

神に近い者 1話（前書き）

アトランティス・シリーズです。

神に近い者 1話

遙か遠い過去の記憶

私には友人が居た。

今はどこに居るのか、所在も知れない……。

だが彼が語り始めた不思議な話を、時折鮮明に

思い出さずには、いられない。

それは遠く遠く遙か昔、キリストですら誕生していない、歴史からその姿をほぼ完全に消した大昔の、大陸の物語だった……。

第一章 神に近い者。

ラストイは池の船着き場の板の上で、髪に風を受けながら午後の陽光が溢れ、波紋の広がる水面を見つめ、つぶやいた。

「……彼……彼女かな？」

とても長い名前……でも私達は彼を、『ミュール』と……そう呼んでいた」

私はビールを持って来ようと思ったがその語り口に、いつもの彼の、夢の話が始まったと気づいて、上がり掛けた腰を落として聞き入った。

彼は気づき、少し笑うと続けた。

「……そう……ミュールの事はいつも、一番鮮明なんだ。

僕はその時代……彼を神のように崇拜していたから……」

僕は笑った。

「今で言う教祖のようなカリスマかい？」

彼は少し俯くが、顔を上げた。

「神はね。人がそう感じるから、神のようだ。と思うものだ。君にとっての神と僕のとでは、違う筈だ。」

けどミュールはあの時代・・・」

そう言つて、ラストイは顔を、上げた。

「僕だけでなく、たくさんの人々に、姿の無い神を強く、意識させた。

きつと神が居るとしたら、ミュールのような者だと」

ラストイが僕をじつと、その空色の瞳で見つめて笑った。

「君がどう取るかは僕には、解らないけれど」

僕はつぶやいた。

「どんな風か、聞かないと解らない」

ラストイは肩をすくめた。

「少し、風がで出来た。中で話さないか？」

僕は、頷いた。

念願のビールを冷蔵庫から出し、喉の乾きを潤すと、ラストイは待つてたように、口を開いた。

「その当時、沢山の超能力者が産まれた。

彼らはみんな、学校みたいな所に通つて・・・そして自分の能力の使い方を学び、適性に応じて職に就くんだが・・・。とても、勝れた能力者だけを集める特別な部門があつて・・・警察で言う、FBIのようなものだ。

ともかく・・・その部署の教育機関に、ミュールは居たんだ」

僕は、頷いた。

だが彼は、その中でも一番、勝れた能力者だろう？と言う僕の期待に少し、瞳を翳らせた。

「僕は小さかった。五・六才かな？そんなもんで・・・ミュールは年下だった。

ミュールはいつも、皆が当たり前に出来る事が出来なくて、沈んでいた」

僕はたつぷり、ラストイを見た。

「ミュールは小石を手を使わずに持ち上げる事すら、出来なかった。

皆出来たのに。僕でさえ。

彼が小石を持ち上げると大抵・・・空中で、粉々に砕け散ったんだ・・・

ミュールは大抵の子供が生まれ育った地域から親から引き離されたせいで、孤独を感じていた上に皆と同じじゃなかったから、いつも疎外感を感じているようだった。

誰もその事に異論は無かった。だって・・・彼は確かに皆とは違っていた。誰もが出来る、当たり前の方が、出来なかったから。

いつ迄立っても劣等生で、授業が進み、もう少し大きな石ですら、やっぱり空中で砕いていた。

教師は「それはそれで、使える能力で、自分が何が出来、そして出来ないかを知る必要があるから、問題ない」と彼を庇ったけど、クラスの皆が彼は出来損ないだと、知ってた。

ミュール自身でさえも。

彼は口数が少なかったし俯いていた。

石がどんどん大きく成っていても結果は同じで、いつもクラスで一番最後に試す役だった。

だって彼を最初にするのと、同じ大きさの石をまた、探して来なくてはならないからだ。

とうとう・・・室内に置ける大きさは卒業し、外に置かれた岩に、対象が移った。

人が一人乗れる程の岩でも、ミュールは駄目だった。

それは頭上迄上がるけれど、その後空中で一瞬で粉に成り、ばらばらと地上に振り撒かれた。

ある時、上級の一人が、授業用に、と持ってきた大岩は、三十メートルもあった。

誰もが試し・・・揺らす事すら出来なくて、それを持ってきた上級生が自分の能力を・・・自分達にみせつけ、からかう材料で持ち込んだんだと、解った。

彼はだって軽々とその大岩を、空中からこの庭へと、運び入れたか

ら。

クラスで一番優秀なヘクトスでさえ、その岩を、左右に揺らせただけだったけれど、殆ど動かす事の出来なかった皆は、それでも拍手を送った。

ミユールの番が来て、皆はその大岩が、持ち上げらずに砕けて、小岩の群が出来ると見守った。

ミユールはだけどそれを、ゆっくり、持ち上げた。

とても・・・ゆっくりだったけれどそれは空中に上がっていき・・・やがてそれは頭上を遙かに超えて青空に、浮かび上がった。

あの時の感動は今も忘れない。

あの巨大な岩が、あんな風に宙に浮かび上がる様は・・・皆呆けて口をぱっくり、開いていた。

彼は我々が、小石を持ち上げそして、下ろすようにその大岩をようやく・・・砕く事なく下ろしてみせた。

どすん！と音を立てて大岩が地上に戻ると、ミユールは微笑んでいた。

まるでやっと・・・皆と同じ事が、出来たと喜んでいるみたいだった。

教師はミユールの対象を捕らえるセンサーが他と違うと言った。

僕らはちゃんと、小石を認識出来るけど、ミユールはあれだけ大きな岩でようやく、認識出来んだと。

それでようやくクラスの皆が納得した。

小さなもの・・・蟻とか・・・そう言ったものを持ち上げるのは、とても気を使う。

小さくて、扱いにくく壊さないよう力のバランスが難しかったし、変に一点に集中すると、砕いてしまう。

ミユールにとって・・・小石が僕らにとっての蟻で、大岩が小石だった。

教師達はミユールのその認識力が、他の人間の許容量をはるかに超えて大きいのに、とつくに注目していた。それが解った時、僕はミ

ユールにとって世界はどんな風に見えているんだろう？と気になった。僕は周囲、せいぜい三十メートル程にしか、世界を認識しないけど、ミユールにとってそれは・・・もっと広いに違いない。

100？それとも・・・200だろうか？

200メートル四方が彼にとっても世界だとしても、やっぱり僕からしたら途方も無く大きく、見えた。

認識範囲を広げる授業で、見える物、聞こえる範囲を広げたら、情報が処理できなくてパニックになり、どの音が近くて、どの音が遠いか解らなく成っていた。

映像はだぶったり、形が変形して認識出来なかった。そして混乱し、ひどい頭痛がした。

教師は少しずつ、慣らすようにしないと、神経障害が起きると、言った。

ある日誰かが言い出した。ミユールがどう見えているのか、知りた

いと。
教師がミユールの手を握り、彼の感覚へと皆を導いた。皆は教師に勧められて教師を通して彼の感覚を、知った。

膨大な世界だった。

あまりにも広い世界がゆつたりと、美しく輝き存在していた。象が群を成して草原を進む。そこに焦点を当てると直ぐ様そこがどこで、群は何頭居て、水飲み場に向かう所だと、解った。

その場で吹いている風すら、感じられた。

これだけ広い世界を同時に見ながら、群の一頭に同調しているから、気温すら感じられるんだと、教師の意識が語った。

水の中で動き回る、イルカの一頭が浮かび上がりイルカは・・・友達を見つけたみたいにミユールに挨拶した。

イルカは彼の事を波長で、存在認識してるみたいで・・・姿が見えなくても気になんかしていない様子だった。

どうやらミユールはそのイルカと波長が合うらしく、しょっ中イルカと、コミュニケーションしているみたいだった。

ミュールの広がる世界で彼に挨拶を返したり存在を感じて居る者は大勢居た。猿や小さな、毛皮の動物。そして・・・大木に至る迄。どこまでもどこまでも広がる、輝く大地と息づく生き物達がそこに居て、皆ミュールが気持ちを向けると、無言で「やあ」と、挨拶しているように感じられた。

彼はこの小さな教室で確かに孤独だったかもしれないが、決して一人じゃなかった。

どころか、信じられない友達が、大勢・・・とても大勢居た。

教師が皆を、ミュールの世界から教室に引き戻すと、一人が言った。「実在してる、世界？」

「ミュールの幻覚だろう？」

ミュールはでもその皮肉に、小さくつぶやいた。

「上手に飛べないから、遠くには行けない。まだ焦点が充分定められないから、体を運べないけど・・・近くの、僕でも飛べる場所の友達には時々、会える。」

海の深い所とか、空の高い場所だと、出た途端、体が圧迫されたり急に凄く寒くなるから、移動出来ないんだ」

教師はささやいた。

「体温調節や、体に空気の膜を張るやり方の授業はもっと、先だけど直それを覚えてしっかり集中できれば、遠くの友達にも会えるようになる。きつと」

皆が呆然とした。

世界と彼は同調していた。

どうしてそんなに大きな物と常に同調していて、気が狂わないのか解らなかった。

自分から少し許容量を超えともう途端、バランスが取れなくて、自分を保てないのに。

ほんの一センチ周囲の範囲を広げただけで、膨大な情報が増えるし、途端処理できなくなつて、音も画像も正確に受理出来なくて、歪み、ノイズが走るのに。

ミユールの世界は正確で鮮明で、安定していた。
でもある事に、気づいた。

ミユールにとつてはあの世界が基準だから、小石なんてそれはそれは・・・小さな物なんだろう・・・。

僕らの蟻なんかより、もつと。

「・・・神の・・・目？」

僕はため息が出た。

つまりラスティの言つた神のように。という事は比喻なんかじゃない。

神が見てるだろう世界を、見る事の出来る人間。

そんな人間が、居る事すら信じられなかった。

確かに・・・神がどう見えているのか、知っている人間がこの地上に居るだろうか？

我々は神を都合良く捕らえ・・・何でも見えて、知っているなら自分を救う事なんか何でもないんだろう。と勝手に、思っている。

でも誰が・・・神が一体どう世界が見えているのか、考えた事があつたろうか？

神の立場で物を見、考えた事なんか・・・無いだろう。

だってそれは・・・不可能だから。

理解出来ない存在だから・・・こんな風、あんな風なんだろう・・・

と想像して神を、勝手に造り上げてる。でもそれは・・・あくまで想像であつて、実物なんかじゃなく実在していないその人の産み出した空想の産物だとしたら・・・。

そんな者が本当に自分を救ってくれるだなんて思い込むのは本当に馬鹿げている。

そして、頼んだ時に救ってくれなかった。と自分の空想に愚痴を言い、「神なんか、居ない！」と叫ぶ。

それは確かにそうだろう。だってその『神』は、自分自身が作り出した、幻だからだ。

でも神・・・もしくは神に近い者からしたら、どうだろう？見えて

いる。話も出来る・・・。

ミュールと親しいイル力が危機の時、ミュールが助けてくれなくて「神は居ない！」と叫ぶだろうか？

ミュールは見えているのに大事な友達を助けられなくて、心が痛むに違いないのに？

きつととても、悲しいに違いない。

僕は吐息を、吐いた。

神に近い能力は素晴らしい世界と同化する恩恵がある代わりに、ひどい悲しみをも内包している。

普通の人では耐え難い悲しみも、常に存在しているんだろう・・・。もしそうだとしたら・・・誰も、そんな悲しみを背負うのに背を向けて神になんか、成りたいと思わない。

普通の血肉の通った、まっとうな感情の、ある者ならば。

だがラスティは笑った。

「神に近い能力は、悲劇だと思ってるようだね」

僕は頷いた。

「だってそれは・・・そう思うよ。」

見知る事が出来るなら、救う能力も無いと」

でもラスティは微笑んだ。

「見知る能力が勝れているから、彼は常に真理から目を反らさない。大抵が自分の都合優先で真理から目を背けるのが、人間だ。」

僕は神とは、「真理を常に示し続ける存在」だと思ってる。だって真理は人を救う。

それこそが神の技で、真理から目を反らしたりしないミュールはだから僕に取って・・・『神に近い者』なんだ」

僕は狼狽えた。

「それ、実際崖から落ちそうな時救うって意味じゃなくてつまり・・・魂を救うって事かい？」

ラスティは微笑んだ。

「だって例え崖から落ちてひどく痛めて死を迎えたとしても・・・

それを受け容れる魂があれば、悲劇じゃない。人生の週末に必ず訪れる事柄に過ぎないじゃないか」

僕は呆けた。

「神はもつと、大きい。大きいから人は理解出来ずにその救済方法が、納得出来ない。」

未熟なのは常に人の魂で、完成されて大きいのは神の方だ。救われているのに救済を理解出来ず、神を罵るのは、馬鹿げてる。

救済されても気づかぬ者に、その救済を解るように伝え、教えるのが、予言者で、聖人と呼ばれる人達だ」

僕が目をまん丸にしたので、ラスティは笑った。

「途方もなく、大きい。だから神の目からしたら・・・人の犯した罪なんて、小石程も、無い。君だって小石くらいの罪は、簡単に許せないか？」

神の怒りを買う大罪を犯そうとしたら、もつと凄い事で無いと。それこそ・・・地球を一つ、意思の力で破壊したら、それは・・・神からしたら、かなりの罪・・・くらいには、なるだろうね。

だってミュールは言っていた。神と呼ばれる存在を時々感じるけれど、自分より数百倍大きくて・・・。

それは途方もない巨人でもとても・・・優しいと。

ミュールの世界観より数百倍だ。

通訳が居なくちゃ、神の言ってる言葉の一億分の一も、解りゃしない。

ミュールに言わせれば・・・神を自分の物差しで計るだなんて、とんでもなく馬鹿にした行為だと。

神が理解出来ないのは・・・当たり前でも人は自分の頭の中で神を作り上げてるけどそんな小さな器に収まりきれない程神は大きいから・・・。

よく誤解が生じるって」

「救われない！と心の底から嘆く者に対して、『ただの誤解』だと言う気か？」

呆れる僕に、ラスティがつぶやいた。

「あまり神の大きさについて考えるな。考えたりすると、気が狂うぞ。」

どこにも足を付ける場所の無い空間でずっと漂い続けるには、余程バランス感覚が無いと。

それが当たり前で、あらゆる事柄を内包しても、真理からブレないでいられるだなんて、やっぱり神って、途方も無い、信じられない存在だと思う」

僕はそれこそ思いつきり呆れた。

「そんな訳の解らない者に今まで人類は「神」と名を付けてすがつてたのか？」

でもラスティは空色の瞳を向けた。

「でもそれを人々が神と認識してるかどうかは、不明だ。」

だって人はもつと身近で立派な・・・聖人のような者を神だと思っている。僕の言う存在が神だと言っても、「それは違う」と言う者も大勢、居るだろうね？」

ラスティが尋ねるように僕を見つめるので僕は、言った。

「でも君の言う、魂の救済。をしてるならそれはやっぱり・・・どいういう形か解らないにしろ、僕に言わせれば確かに神の領域だとは思う」

ラスティは思い切り、微笑んだ。

2話

風が頬を、叩いてた。

そう・・・この森の外れの岩場で、私達はリュックを下ろし昼食にしようと屈んだ。

その時について・・・ラストイに例の話の続きを、切り出した。

「・・・それで・・・君もその時代、その文明に居て・・・つまり、超能力者だったのかい？」

ラストイは一瞬、遠い目を、した。

が頷くように俯いて、ささやいた。

「・・・まずいんだ・・・あまりに、鮮明過ぎる」

そうして僕に振り向き、空色の瞳でじつ、と見つめた。

「たまに・・・」

そう言つて彼は言葉を、区切つた。ためらい、だが続けた。

「あちらに居る自分が本物で、ここに居る自分が幻影のような気になる」

私がそれでも彼を見つめていると、彼はふつ、と笑つた。

「・・・そう・・・。今で言う、超能力者だ」

彼は顔を上げて空を見上げる。

真つ青なその広い空間に懐かしさを覚えるみたいに微笑んで。

「あそこを自由に・・・飛び回つてた」

僕は彼を覗き込んだ。

「空を？ スーパーマンみたいにかい？」

彼は空に視線を向けたまま、告げた。

「いや？ ローゼイと一緒に・・・」

彼はそれは何かと問う目を向ける僕に振り向いて、言つた。

「空飛ぶサーフ・ボードだと言つたら、笑えるかい？」

彼は言つたとおり、笑つてた。

けど僕は説明を求めた。

「・・・特殊な、石で出来てる。感応力があるんだ。つまり・・・意思の伝導がし易い・・・鉱物で・・・。それに飛べ。」と念じる。すると宙を浮く。

ああ・・・。ほら。ハリー・ポッターに出て来る。魔法使いの杖が、主を選ぶ。

あんな感じた。一人一人、扱いやすい石は違う。皆自分の気持ちを聞いてくれる石を選ぶ。

自分のボードを扱えたから、他人のも同様に扱える訳じゃ、無いんだ。ボードにはそれぞれ、癖があつてね・・・。みんな自分の石に名前を付けてた」

「君のはつまり・・・ローゼイ？」

ラストイはそう。と朗らかに、微笑んだ。

「僕の愛しい、相棒だ」

「つまり・・・その石に飛べと念じて、石は君の言う事を聞く」

「そして僕を乗せたまま、空を飛ぶのさ」

僕も、空を眺めた。

どこまでも広がる、その手の届かない空間を。

「なら、鉄の塊に乗って飛ぶ現代は随分、無粋に感じられるんだろ
うな」

「少し話したろう？自分の回りに空気の膜を作る。
宇宙服のスーツ代わりだ。

それで体温調節もするし、酸素も補給する・・・。

それが出来なきゃ、高く飛べないし、水にも潜れない」

「水に、潜るのかい？」

「ああ・・・。微調節すれば、難しい事じゃない。

飛んだ場所の具合でいつも大抵・・・無意識に調節する癖が付いて
いたしね」

「でもそれにはまず空気の膜が、作れなきゃ駄目なんだな？」

「それと、自分の“言葉”を聞いてくれる石を見つけ・・・それを
自在に操る能力だ」

3話

彼はバーベキューの良く焼けたウィンナーを櫛に刺して、口に運ぼうとし、私は言った。

「火傷する」

ラストイは笑うと、櫛を口から離した。

パチパチと炭火が弾ける。

「・・・そう言えば・・・言ってたろう？」

例の・・・国では、特別なエネルギーを使っていたと」

日常会話の延長で、私が尋ねるのに、彼は慣れた様子だった。

少し俯くと、ささやいた。

「満ちていた。国中に。」

至る所に・・・それは脳を、全ての細胞を活性化し・・・そして次々に人は超常能力を目覚めさせた」

ラストイは顔を上げて、私を見た。

「こことは丸で違う。空気の中にそれは溢れていて・・・力が常に漲っていた・・・」

頭の中は澄んで・・・何でも出来る氣に成る。

体の淀みは自然に無くなり・・・常に代謝が起こり、病も少ない・・・。

少し集中すれば簡単に・・・物を、浮かせられた。

なのに・・・」

首を振る彼を、私は見た。

彼はちらりと見つめる私に視線を送ると、またささやいた。

「・・・ここでは丸で枷のように、全てが鈍く、重い・・・」

私はつい、彼に尋ねた。

「牢獄の・・・よう？」

ラストイは笑うと、頷いた。

「ここと比べるとあの世界で私はまるで別の、生き物のようだ・・・

。

天使だとか魔女だとか、魔法使いや妖精は・・・あの世界じゃ全然特別な存在なんかじゃない。

でもここでは・・・」

私は少し、焼けたタマネギをひっくり返してつぶやいた。

「神話だ」

ラスティは頷いた。

「その・・・エネルギーはつまり・・・どんなエネルギーなんだい？」

僕の質問に彼は少し首を傾けた。

「宇宙エネルギーの一種で・・・銀河の中心に溢れる程存在している。」

それを引き入れ、自在に使うやり方を遠い祖先が、訪れた宇宙人から学んだ。

あの当時は多くの空からの訪問者と行き来が、あったから」

「じゃあ君も・・・宇宙に出たのか？」

ラスティは俯いて、笑った。

「そりや・・・出かける者も確かに、居たが・・・行って、どうする？環境も生態も・・・桁外れに違うのに」

「大変な苦労かい？」

ラスティは頷いた。

「田舎の、宿屋のように・・・連中は来て、欲しい物を手に入れ、代わりに我々でも使えそうな物を置いていき・・・また去っていった。」

でも・・・国に満ちたエネルギーのせいで・・・それに合わない者は訪問を控えたから・・・どちらかというと友好的で、精神レベルの高い者が多かった」

ラスティは私をじつと・・・見た。

「この銀河にはひどい淀みがある。」

真っ暗な空間で、淀みきつたその場所に住まう精神生命体は・・・

我々のエネルギーを嫌う。

そう・・・丁度、悪魔が神の光を嫌うように・・・。

そいつらは、本来の生命体のような自然な発育から見放されているから・・・淀みを好む。

精神の淀み・・・肉体の淀み・・・。

つまり我々が、悪魔と呼ぶような生命だ」

「・・・本当に存在するのか？

そんな生き物が」

ラスティは真顔で私を見た。

「でも手足がある訳じゃない。

エネルギー体で体を持たず、感応力がある。

だが迂闊にそいつらと波長が合うと・・・。

残酷な事が、大好きになる。

生かす力とは反作用の力で、滅ぼす事で、生きているから。そんな

風に思い出すと時々、悪魔と交流を持つ者はあの特殊な儀式で・・・

連中と通じ、力を得てないかと・・・思う程だ」

「じゃ・・・そいつらはエネルギーの塊なのか？

でもどうやってここに来る？」

「波長が通じると一種の回路が、出来るから。

その回路を伝わって、意志疎通が出来る。

呼び出した人間の意識をすっかり乗っ取れたら、まるで抵抗無くその人間を操れるだろう。

自分の考えややり方を少しずつ・・・教え、そして段々慣れさせて、やがて乗っ取り、操る。

そして回路を通じて、淀みのエネルギーを吸い上げる。

何一つ産み出す事の無い暗黒の地に住む者達の唯一の・・・活力源だ。回路が通じればそれに全勢力を使って吸い上げようとするだろうね」

私はつい、ぞつとしてラスティを、見た。

「君はそういう奴らと・・・出会う・・・と言うか・・・通じた事

が、あるのか？」

ラスティは笑った。

「だから・・・奴らに捕まらない為に、皆我々が使っている宇宙エネルギーに囲まれて暮らすんだ。

それが濃ければ濃い程、シールドの役目を果たすから。

昔は儀式を通じて連中と通じる人間も居たろうが・・・。

けれど我々の国には入り込んだり出来なかった」

「・・・つまり君たちの宇宙エネルギーは連中に取っての・・・神の光のようだったから？」

ラスティはその通り、と笑った。

私は少し、ぞっとした尋ねた。

「今その・・・君たちが昔使っていたエネルギーはこの地球には、無いんだろう？」

じゃ・・・もし連中と回路が通じたら・・・為す術も無いじゃないか」

ラスティは頷いた。

「まるつきり無い訳じゃない・・・。

ピラミッドが昔から、あるだろう？」

あれがかつて我々が宇宙エネルギーを集積する為の装置だった。

それに生命のある所に必ず宇宙エネルギーは存在している。確かに、昔に比べれば、格段と少ないけど。

でも時々、とても気持ちよくて体の疲労も重みも取れ、とても清々しい気持ちになる場所があるだろう？」

その場所には宇宙エネルギーが存在している」

「それが・・・満ちあふれていた？」

ラスティが笑った。

「もつと、濃く」

私は何となく・・・それが濃い場所にずっと居た古代の彼らが超能力を持っていた理由が、理解出来た。

脳がきつともつと・・・もつともつと、活性化していたんだろう。
睡眠不足で仕事をしていると、全然はかどらないのに、十分休養を
取り、すっきりした頭だと作業能率が格段に違うのは、当たり前
の事だ。

でももつと・・・頭を隅々までクリアにしたら・・・超能力と呼べ
る・・・第六感がもつと・・・作業能率を、上げる事だろう・・・。
きつと。

それは彼らにとっては当たり前できつと今のうちに、超能力がある
人間を特殊な存在だなんて、思わなかったに違いない。

むしろ・・・超能力のある人間が、彼らにとっての人類だったろう。

4話

僕はその時自宅でふと、思った。

超能力者って、どんな感じなんだろう？と・・・。

だがそれを口に出すより先にラスティが僕に振り向き、微笑んだ。僕は笑って言った。

「まるで僕の言おうとした事が解るみたいだ」

ラスティは頷いた。

「君は質問をする前僕に、その考えを向けた。

頭に君の訊ねたい事が、浮かんだ」

僕はびっくりした。

「それ、人の心が解るって事かい？」

ラスティは笑った。

いつも彼はとても軽やかに、そして爽やかに笑う。

「・・・そうだな。言葉に出す前の意識の段階で僕と君はとくに会話してたって事だ」

僕は首を、捻った。

「精神エネルギーの一種で人に向けて思考波を発する。つまり、テレパシーだけど、敏感な受け手、もしくは思考波を読むのに慣れた相手は、向けられただけで解読出来る。言葉に出さなくても」

僕は確かに、ラスティを意識した。でも・・・それだけだ。

「たったあれだけでつまり・・・僕が言おうとした事が、解るのかい？」

ラスティは頷いた。

「動物は大抵がとても優秀な受け手だ。

人間の言おうとした事が解る」

僕は暫く呆然とした。

「そりゃ・・・確かにそういう感じがする事はある。つまり、犬と居る時なんか」

ラスティは少し気の毒そうに僕を、見た。

「僕ら人間は自分の見聞き出来る範囲が世界の全てだと、思いがちだ。」

けどもつと違う波長はたくさんあって、僕らが感知出来ないと思ってる意識レベルでも正確に読みとれる者も、居る。

つまり、時間が同時に存在するレベルや……。人が意識しない無意識レベルでの波長をだ」

僕がまだ彼を見つめているので、ラスティは付け足した。

「つまり言葉に出さなくても会話出来るとしたら、瞬時に膨大な情報を交換し合える。それに、距離も関係ないんだ。

どれだけ離れていても、頭に思い描いて強く波長を合わせれば」

僕がまだ不思議な者を見るようにラスティを見つめているのでとうとう彼は、僕に首を傾けた。

「だって、テレビだってそうだろう？

チャンネルを合わせれば、番組が見られる。

でも出力してる電波はうんと遠くから、送られて来るだろう？」

僕はやっと、ああ。と頷いた。

「それに考えが聞こえるのは、ラジオに近い」

「つまり君の頭の中には他の人が受信出来ない、テレビやラジオが内蔵されているって事かい？」

ラスティはまた爽やかに笑って、首を横に振った。

「これは実は誰にでも内蔵されている。

皆その存在が自分の中にあると知らず、使い方も知らないだけで例えあっても、それがあるって知らなければ、使えないだろう？」

僕はびっくりした。

「じゃ、僕の中にも、あるのかい？」

「当然、あるさ。強く意識して、使い方を覚えれば、君にだって出来る」

「……じゃあ……。念動力とか……。つまり、手を使わずに物を動かす力だけだ。僕にも出来るかい？」

ラスティは少し周囲を見回し、落胆したように吐息を吐いた。

「昔は空気の中に、“力”が満ちていた。

以前言ったろう？宇宙エネルギーの一種だと」

「ピラミッドが集積装置だつていう、あれかい？」

ラスティは頷くと、ささやいた。

「今はとても膨大な精神エネルギーが要る。

神に近い存在だと言った、我々の時代随一の能力者、ミュールは、銀河の中心の、エネルギーの溢れる場所と精神が直結していたから、膨大なエネルギーを扱う事が出来た。

けど我々は、生活で使うエネルギーがそこら中を被っているその中から、力を得る事で能力を、使っていた。

今の時代、ミュールのような者ならもう少し、能力を使えたらうが・
・・。

エネルギーを得る宛の無い我々では、物を持ち上げるだけでも、途方も無い精神エネルギーを消耗するだろうね。

例え出来たとしても、効率良くエネルギーを得る方法が見つからなきゃ、疲れ切つて、精神で物を動かすより手で動かした方が余程マシだと、思うだろう。

必要性の無い力は使われなくなる。例えそれが出来るとしても」

僕が、まだラスティを見つめるので彼は続けた。

「物質をどういう形にしる変容させるには、とても多くの“力”が要るんだ。

瞬間移動というけれど、肉体を移動させるのはとても大変で多くの力が必要だけど、どうしても飛んで行って逢いたい人が居るとする。そういう時、人は精神を飛ばす。
うんと、軽いし扱いやすいから」

僕はまだ、ラスティを見つめた。

「けど君の大昔居た時代では、出来たんだろう？」

ラスティは笑った。

「軽々とね。

だって10キロある物を持ち上げると、10グラムの物を持ち上げるのと、どっちが楽だい？

僕らの時代は物質の変容はたった10グラムの物を持ち上げるだけの精神エネルギーで実現出来た。

だから君もそういう環境に住んでいたら、超能力なんて、不思議な物でもなんでもなくて、人間の持っている当たり前前の能力だと、思えるようになる」

僕はつい、身を乗り出した。

「つまり、誰もが当たり前前に超能力を、使っていたんだね？」

ラスティはだが、少し俯いた。

「そうだね。でも遺伝子の配列とかで、どうしても能力が使えない者や……」

得意、不得意もある。

その力を使う事に抵抗を感じない者も居れば、必要ないと、思う者も、居る。

なぜって……」

僕の視線を読んだのだろう。ラスティは言葉を区切った。

「なぜって、刃物を使うのには、訓練が居る。

慣れないスポーツをするとひどい筋肉痛になったりするし。

どれだけ能力があっても、それが嫌で、使わない人間だっている」

「超能力って、魔法みたいに使えるんじゃないって？」

ラスティは苦笑した。

「なんだって、使いこなすには訓練が必要だろう？」

第一、物事にはいつだって、リスクが存在する。

そのリスクを乗り越えられる者が、望む事を実現させられるんだ。でもリスクを重大な事で、控えようと思えば……

それを普通人は、避けるだろう？

ただ、本人の選択だ。

超能力が自分に必要で、リスクを感じてもまだ使いたいと思うかどうかは」

「つまり・・・超能力にとってもリスクって・・・」

「頭痛がしたり、体が捻れたように感じたり？使う能力によってもそれは違う。空間移動だって、飛ぶ先をちゃんとイメージして固定出来なきゃ、とんでも無い場所に出て、ひどい目に合うし、体質に合わないとか、酔ったようになりたり、耳鳴りがしたり。色々さ。

船乗りに成りたくても、ひどい船酔いする者には、向いていないように」

5話

今でも・・・彼の姿が目には、焼き付いている。

そんな風に親しげに・・・話しが出来たのは、たいして長い時間じや、無かったから。

彼は段々、遠い瞳を、するように成った。

丸で、別の世界に居てふいに、自分がこの世界に居る事を、思い出すかのように。

理由を、訊ねたかった。それに私は、彼の話が大好きだったから、子供が話をねだるように、彼の口からその世界の話を、もつと引き出したかった・・・。

けれど私が彼とその世界について話した事は、それだけだった・・・。

彼は時々、見て触れるのに、精神は別の次元へ飛んでいったかのように、虚ろだった。

ただ・・・。一度私が、あんまり心配げに、見つめたからだろう・・・。

彼はこの次元へ戻り、すっかりした瞳で、私に微笑みかけた。

「・・・すまない・・・。時々・・・過去が今に、とって代わるんだ。もう・・・とつくの昔に、終わった事なのに・・・。

たった今、起こった事のように、生々しく思い出す・・・。

どうしてそうなったのか、良くは解らないけれど・・・。

でも・・・。」

「でも？」

「たった今、あの石版に乗って大空を飛んでいたのに、現実に戻ると、渋滞した車に、押し込められていたりする」

彼は、笑ってみせたが、それが冗談で済ませられない緊迫感が、あった。

「・・・君は、どこに居たんだい？」

僕が聞くと、彼は・・・困惑とも、苦みとも取れる・・・それでも無表情で、透けていくかのように、つぶやいた。

「・・・つまり・・・あそこさ」

「・・・アトランティス？」

僕はその言葉を、慎重にささやいた、つもりだった。

なのに彼は、その言葉の響きに捕らわれたように、遠い、瞳をした。僕には、解った。

彼の精神はとづくに終わった、その過去に存在していて、肉体を残してそこに再び、呼び戻されようとしているのが。

僕は慌てて、彼の腕を握って引いた。

彼は、『ああ・・・』と短くつぶやくと、僕に振り向いた。その空色の瞳はまだ、遠かったが、自分を肉体に引き戻そうと、彼は試み、そしてやがて・・・彼の瞳は焦点を取り戻し、僕をはっきりと、その瞳に映し出した。

「・・・どうして今、こんな風に成るのかな？」

彼は、微笑もうと、した。

「感覚が、無くなる。過去の記憶だけに支配されてその、世界から抜け出せない」

「物語みたいに、そこで過去を辿って体験しているのか？」

僕は、そつと訊ねたが彼は・・・首を横に、振った。

「・・・ずっとそこで生活してる訳じゃ、無い。」

すぐリアルだけど、ちゃんと、とづくの昔に終わった事だと、僕は知ってるんだ。それに・・・」

彼は一瞬、苦しそうに顔を、歪めた。

「・・・特に鮮明な記憶が、フラッシュバックのように映る。別の記憶から別の記憶へ・・・重なりながら、そこで見たもの、感じたものを鮮明に体験しながら・・・でも移行している」

「順では、無くて？」

ラストイは首を、振った。

「・・・砂漠でミニールを担ぐ悲嘆にくれた人々と共に歩き、足元

の砂を蹴り上げたと思ったら・・・。

叫んでいる。大勢の人々に、避難を呼びかけて・・・。荒れ狂うように炎が地面から吹き上げ、揺れる大地の上で。

起きた順序は、逆なのに・・・。

かと思うと、原始に戻った生活に人々が疲れ・・・だが動かぬミュールが、幸せな夢で人々を包み・・・指一本動かせぬ程の状態でありながら・・・人々を元氣付ける場面や・・・。

感動が押し寄せるのか、ラスティの瞳は、潤んでいた。僕が気づいたと知ると、彼は首を横に振り、涙を隠さず、ささやく。

「・・・救う為に・・・我々を救うために、そんなにもひどい傷を追って・・・意識不明で口もきけないのに・・・我々の、悲嘆の声に、夢で、応えてくれる。壊れた大地・・・。荒れ果てた世界・・・。」

でもミュールは・・・。」

僕は泣く、彼を見守った。

「・・・夢で応えてくれた・・・。」

緑成す大地。空へ羽ばたく、何千羽の鳥達・・・。

水辺に集う、生き物。そして、彼らと共に暮らす、我々・・・。

悲嘆は無く、日々の糧に満足し・・・美しい地球に、たくさんの生命と共に生きる、幸せな、私達だ・・・。

皆、命の輝きに満ちていて・・・。それはとても・・・とても美しく、幸せな夢だった・・・。」

そう言つて、ラスティは震えた。

感動、するかのよう。

僕にその夢は、解らなかった。

ラスティは言葉を、続けた。

「人は誰でも、持つてゐる物を失うと、悲嘆に暮れるだろう？」

あの時我々は、文明を、失った。

だがミュールは・・・。全ての自由を、失った。

あれ程自在に能力を操り、空を掛け・・・誰よりも素晴らしい能力

を持つ彼が……。かろうじて、命を保ち、意識も口クになく……
体を、自らの力で、動かす事も、出来ない。

我々は……彼の体を、まるで帰る場所すら無くして彷徨う、我々の象徴のように……。砂漠の中を担ぎ、歩き続けた……………。
翼をもぎ取られた、鳥のように……………。

私達は彼の事を、思っていた。

それでも彼がそこ迄自分をなげうつて成し得た事は、本当に偉大な事だったから……………。

私達は、彼を氣遣った……………。

小さな子供でさえ……………。

彼の顔に、砂漠の太陽が照りつけると、布で遮る氣遣いを、見せた程だ。

彼がもし、意識を取り戻した時……………。どう、声を掛けていいのかも、解らなかった。

いつそ……このまま、死んだ方が、彼の為だと、言う者迄、居た……
……だけど彼に、悲嘆は一欠片も、無かった……………。

彼は、幸せだったんだ。

指一本、動かせない程の体に、成つても……………。

この、惑星が生きて、命が輝き続ける事が。自分の不自由さよりも、何倍もその事が……………。」

ラストイの瞳から、ひっきりなしに涙が、滴り落ちる。私は他人の事をどうしてそこ迄……………。

涙が滴る程の思いを込めて、話せるのか、不思議だった。
が彼は続けた。

「……幸せ……………だったんだ……………。

この世界を救う事の為なら自分の身がどうなろうと……………。
構わないと、君なら、思えるかい？

僕らには、解らなかった。

ミュールはやつと少し草木の生える場所で我々が落ち着き、生活を始めても、意識が戻らなかった……………。

全てを失った不自由に皆気持ちがささくれだって……。しよつちゅう、諍^{いっか}つたし、希望も、なかった。

なのに彼は、最も自由のきかない不自由さの中に居ながら……。幸せだったんだ……。

不自由さは、問題じゃないと……。。

彼は言った。その、夢で我々に、語った。

この大地が損なわれず……。碎け散ったりせず……。

存在していてそして……。命の煌めきが、生き生きと再び、脈打つ事こそが、一番大切に、幸福な事なのだ……。

だってその夢の中の、沢山の……。ゾウやライオン……。ワニ迄居た……。

イルカや……。鳥達……。無数の……。生命達が大地の中、ゆったりとくつろぎ、駆け回り、空を飛び水の中を自在に泳ぐ姿は本当に……。

本当に、綺麗だった……。

まるで、こう言われているようだった。

『この美しさの前では……。どれだけ失ったように感じられたとしても……。でも決して、少しも、失われてなんかいやしないのだ』と……。

『もし失ったとしても……。この美しさの前では、大した代償なんかじゃ、決していないんだ』と……。

「とても……。幸せな、夢だった？」

ラストイは、頷いた。

僕は彼にそつとささやいた。

「……。身動き一つ取れない……。そのミュールの見せた……。ビジョン？ だろう……。。

それで皆が……。励まされたのか？」

ラストイはまた、頷いた。

「諍いは、まるで風船がしぼむように消え失せ……。まるで夢の中のたくさんの生物のように我々も……。生きる力を、取り戻した。

生きている事だけで、幸せで……。その為には不自由さ等、問題じゃあ、なくなった……。。

僕は知らなかった。

ただ、“生きている”ことが、あれ程美しい事だったなんて……。。

ただ純粹に、“生きる”事があれ程……。幸福な事だなんて……。本当に、その時迄……。。

ラストイは言つて、僕を、見た。

「僕らは、“失われた”と、思ってた。

けど、ミユールは“護られた”と、感じていた」

その時の、彼の声と瞳があんまり静かで、僕は、発する言葉を、何一つ見つけられなかった。

6話

僕は、考え続けていた。

ラスティは日々、虚ろに成っていた。

その時ももう少し…。彼に何が起こっているか、考える知恵が僕にあつたなら……。

だが僕は、仕事をし、週末に彼に会う楽しみに
それでも夢中だった。

まるで、お気に入りのドラマや小説の、続きを待つように…。

コテージで、ラスティと再会した時、彼の印象があまりに…。
あまりに透明で、透けているように感じられ

僕は呆然と、した。

「…まだ…アトランティスが、滅亡した時間に…いるのかい？」
そつと、尋ねると彼は、笑った。

そして僕は、彼の隣の椅子に掛け

風を感じた。

明るい、日差し。

そよぐ風に、優しく枝を揺らす木々。

ラスティはそれらを身の内に吸い込むように、顔を上げる。

「…ミュールが飛び込まなければ間違いなく…」

あの時この世界は、終わっていた」

僕はラスティを見つめた。

ラスティは、何も知らない子供を見るように
僕を見、ささやいた。

「…アトランティスが崩壊しただけだなんて
とても、幸運な出来事だったんだ…」

つまり、その時アトランティスどころか、地球が砕け散る
危機だったのだから………」

僕は、喉が詰まった。

惚れた彼女に過去何人かの男性が居たと知らされ…。

それは…そうだろう。と思いつつも、それでもやっぱりその事実にはショックを受けてる事に、似ていた。

「…長い歴史だから……」。

僕が知らなくても、そういう事態が何度か

あったらうと想像は、付くけど……」

ラストイは吐息を、吐いた。

「…自然に起こったんじゃない、アトランティスの科学推進チームの、仕業なんだ」

僕は目を、見開いた。

「…だって…地球を丸ごと一つ砕くのは、結構大変なんじゃ、ないのか？」

ラストイは俯いた。

そして、ビールを手にとると、口に運びながら、言った。

「宇宙人が持ち込んでものを、改良したんだ…」。

その当時、彼らは大きな船を造るのに、夢中だった。

僕らは広大な…それでも島に暮らしていたし、地球はもっと、広がった。

大きなクリスタルの…ピラミッド型の空飛ぶ、都市を作り上げ…。

それで空中を移動する巨大な船を、作り上げた」

「…ラピュタみたいな？」

「発想はそうだけれど…。でももっと、モダンだったよ。

クリスタルの巨大ピラミッドが、空中を漂うんだ」

僕はその時初めて、アトランティスの文明について

考えた。数々の、神秘だろう、その文明が、とんだかを…。

「…でも実験は、失敗した。

それは確かに宙に浮き、何千人をも乗せて漂ったけれど

都市を離れ…エネルギー源を離れると途端

エネルギー循環が上手くいかず、砂漠の真ん中に、どすん！と

落ちたんだ……」

僕は、ラスティを、見た。

「…それは…とても無様だな」

ラスティは笑わなかった。

「エネルギーが確保出来ない以上…どうやってそんな重い物を元の場所に戻せると思う？」

何千人もの人を救出する手段が、考えられた。

大勢の能力者が集められ、その都市を離れ

エネルギーの満ちあふれていない土地で、

ミュールが彼らにそのエネルギーを送り…。

彼らは次々と人々を、瞬間移動させた…。

都市へと。

それでも遭難した人の数は、多すぎた…。

半数以上を送り…そしてもう一度、クリスタルを

持ち上げられないか、やってみた。

…てんで、駄目で………。

そこで僕らが、駆り出された。

重い物を持ち上げるのが、得意な能力者達だ。

皆が、巨大なクリスタルの周囲に距離を開けながら

並び囲み………。

…本当に、あれは大きかった…。

囲んだ面はガラスのように…太陽の光の反射で周囲を、照らしていた。

僕はどれだけ頑張っても…。

あんなでかい乗り物を宙に浮かせられる想像が、付かなかった…」

「…乗り捨てられたのい？」

「…ちゃんとアトランティスが崩壊した時、都市と一緒に滅んださ。

…つまり、ミュールのエネルギーを我々一人一人が受け取り…

その小山を、動かしたんだ。

自分でも、無理だと思ってる事が目の前で

起こってる。

あれは…感動したよ」

僕はその巨大なピラミッドが、宙に浮く様を、想像した。

「…それは、都市を離れた場所を移動する為に、造られた都市の中でそんなにかいものが空に浮かんでいたら邪魔でしようがない…」

僕は連中が、エネルギー回路を作り替え

エネルギーの乏しい場所でも確保出来る方法を見つけたし、それが…都市を離れ

浮遊都市として機能する為に取り組むのだと思っていた。

が連中はその大失敗で懲りて、別のものを、造ったんだ…。

つまり、アトランティスのみならず、地球を丸ごと破壊する程のエネルギーの集積機を…。

多くのエネルギーが集積出来ればもつと…

多くの事が出来る。と謳って…。

だが実質、今の文明にそんな物は

必要じゃ、無かった…。

人々は満ち足りていたし、満足だった。

過ぎた物を手にすれば扱いを間違えて、不幸になる。

…結局、そういう物で、だが住処の地球まで無くしそうに成ったんだから……………。

ひどい発明だとしか、言えない……………」

「彼らが発明したのか？」

ラストイは、深刻な顔をし、首を横に、振った。

「…宇宙人の使っていた装置を、改良したんだ」

「…失敗…って……………。爆発したのか？」

ラストイはまた、首を横に、振った。

「…集めたエネルギーは本来、都市の経路を辿って各ピラミッドに散り、そこから…多くの施設や都市

民家へと運ばれる予定だった…。

でもその膨大なエネルギーは、変換装置を破壊し、地球のコアめがけて、一直線に注がれ続けた」

僕は、その凄まじいイメージに、呆然と、した。

「一直線に？」

ラスティは微かに顔を揺らし、僕は尋ねた。

「膨大な、エネルギーが？」

ラスティは早口につぶやいた。

「…制御はまるで不能で、エネルギーの向きを変える事が出来ず暫くしてアトランティスの地表は、波打った。

…そんな凄まじい火柱がコアに向けて突き抜け続け…。

アトランティスはその形を保つの、時間の問題だと、思われたし我々は必死でただ、脱出する為の努力を、続けた。

…凄まじい晩だった。

やがて地表から、火柱が上がり、炎で都市は、埋め尽くされ地表の揺れはどんどん激しくなり…

僕は、思った。

このままだと、どこに逃げても…。

この揺れは、収まる事が無いのではと…。

この揺れは、どの土地にも及びその内…。

この大地全てが火柱を吹き、いつか…。

粉々に…。

その時の恐怖は、あの場に居た者にしか、解らないだろう。

我々だけし、や、無かった。

あの時、地球上の生き物全てが…。

どこにも逃げ場無く、滅び去る恐怖に、包まれた」

僕はその、生々しさに、言葉を失い、ただ、ただラスティの横顔を、見つめた。

だが、ようやく思い出して、つぶやいた。

「…でもミュールが、何とかしたんだろう？」

声は、掠れていた。

ラストイは、頷いた。

「僕は、その場に居なかった。

だが装置を止めようとしたエモオンテが……。

ミュールは逃げろと言い、自らその凄まじいコアに突き進むエネルギーの中に

身を投げて、自らの体でその流れを……変えたのだと」

……僕は、涙を感じた。

どうしてだか、解らない。

その人智を超えた凄まじいその場所で、ミュールがどれ程必死だったのかを

思ったせいなのかそれとも……。

そんな場所へ、入って不可能とも言える、向きを変えようと挑む決して諦めないミュールの姿に、感動したのか……。

「……か……わったんだろう……？」

だから今、僕らはここに居る」

ラストイはゆっくり……とてもゆっくり、頷いた。

「……ミュールに続き、もう二人、飛び込んだ……。

ミュールが指一本動かせなくとも

生きていたのは、彼らのお陰だと……。

そしてミュールは、飛び込んだできた二人に

自分のなけなしの能力を使い

シールドを張って、守ったと……。

二人は、自分達こそ、ミュールを助けたくて

飛び込んだのに……！と……。

泣いていたと……。

エモオンテはもう、必死で、宇宙から吸い寄せられるようにその装置に流れ込む

エネルギーを切ろうと、した……。

ミュールとその二人を救おうと……他の者達も必死に成った……。

やがて、装置は止まり、エネルギーは消え…。

ミュールは力を失い、地球のコアに向かう深い穴に…。
落ちていった。

集まった者達は必死で彼を、止め、掴み、引き上げた…。

彼は生きていたが、体の機能の殆どが失われ…。

気絶したまま、目覚めなかった」

7話

僕は待った。

辛抱強く。

ラストイが再び口を開くのを、待ち続けた。

「…その後だ…」

帰る地を失い、エネルギーをも無くし…。

我々は流浪の民と成って、砂漠を彷徨い続けた…」

「…つまり…？」

ガソリンの切れた車みたいに…。

移動手段も、失われたのか？」

「能力も…」

エネルギーの満ちた地で、あれ程簡単に持ち上げられた物ですら…。

僕は数センチも、持ち上げられなかった…。

必死に成れば成る程、頭痛がひどい。

皆、力を持つ者達は、その能力すら、諦めた…。

エネルギーの満ちていない世界でいつも、ミュールが…。

我々にエネルギーを送り、助けてくれた。

けれど、地球を救い、意識すら無い彼をも…頼れない。

皆、どんどん無気力に、成っていった。

争いは、絶えなかった…。

全てを失い…生きる、意味すら、解らなかった。

どうしてあの時大陸と一緒に、滅ばなかったのかと

悔いて嘆く女性を慰める言葉を誰も…持たなかった」

僕はその民の群を、思った。

大恐慌では、財産を失った人々がビルから次々と身を

投げた。僕は勿論…その時代に生きていなかったけれど

でも…空から飛べない人間が飛び降りて来る姿を

幾度も見るのは、やり切れない気分だろう…。

ラストイは僕に、振り向いた。

「その時の鮮烈な記憶と共に、だが直ぐ

その前に、引き戻される。

まるで、既に終わった事なのに

もう一度ちゃんと、見ろ。と…

言われてるみたいに。

その前の、会議に。

連中がその装置のプロジェクトの、承認を取る場面…。

そして…装置を稼働の許可を、勝ち取る場面…。

どうしてもっとあの時……」

ラストイの、肩は揺れていた。

「…反対しなかったのかと……。

奴らを、止められた筈だ。

なのに、なぜ…。

僕は…僕たちは、そうしなかったのかと…」

僕たち？

ラストイは、口に出さない疑問を、耳で聞いたかのように、返答した。

「…この気持ちに成ると、僕だけで無く、僕の後ろに幾人も…。存在しているのが、解る。

たくさん、人の気配を、毎度感じる。

彼らは皆、同様に思っている。

『どうして…』と…。

心から、悔いている。

僕、同様に。

それで……」

僕は彼を、伺った。

ラストイはその時、ようやく、笑った。

「…それでつまり…僕は繰り返し

過去に引き戻されるのだと、解った。

とても、大きな悔いで…。

魂に、刻み込まれた後悔が、決して

僕たちの記憶から、去って行かない…。

生まれ変わり、記憶をすつすり無くしても…。

棘のように刺さり、それが痛み…。

思い返さずには、いられない…。

その痛みが、何であるのか…。

つまり…。

とても、愚かしい事だ…。

どうしていいのか、僕は実は今だに解らない。

僕は破壊をもたらした者達の欠損を、理解出来ない。

彼らは…。

ミュールに、嫉妬していた。

人々が彼を崇め、崇拜するその気持ちをも、自分たちに向けようと

必死だった。

巨大なクリスタルを造り、人々の関心を自分達に向けようとしたり

…。

だが結果、失敗し、尻拭いをミュールがし…。

彼らは逆に、ミュールの偉大さを世間に晒しただけの、惨めな結果に

満足しなかった…。

そして次の失敗ですら…。

ミュールが尻拭いを、した…。

最早人々の中でミュールは完全に、神格化され…。

崇める粋を超え…。

彼の偉大さと心の広さと深さは、神話に近かった…。

そうしたのは皮肉にも、連中だ…。

共に流浪の、民の中に、彼らは、いた…。

彼らは自分たちが、ミュールを神にまで押し上げた事にこそ、絶望していた。

どうして……。奴らはミュールしか、見えなかったのだろうか？
世界を見ていたら……。

あんな物を造る、必要すら、無かった…。

能力を持たない彼らは、科学で、神に成ろうとし、結果…。
神と成ったのは、勝れた能力者の、ミュールだった……。
つまり…。

僕が今、思うのは、そういう事だ。

科学で世界は、感じられない…。

人の皮膚の、暖かさは、解らない…。

勝れた能力者は、世界を感じられる……。

人の痛みも解るし…。声をも、聞く。

科学が進み、能力を神話と否定する事は、僕にはどうしても…。

自分の都合の為なら真実に蓋をする行為に、思えてならない……。

自分の都合良く物事を運ぼうとするのなら…。

他の犠牲は無い物としなければいけない。

目と耳を、塞ぐ事……。

そうすれば、都合を押し通せる。

だが……。

アトランティスはその愚かさで、滅び去った。

目と耳を塞ぎ利己的に突き進む事が

いかに、不自然か……。

そしてそのツケは……。

いつか必ず、還ってくる。

多くの人々を巻き込み…。

最も、ひどい形で」

僕は、ラステイがその時代の辛く苦い思いと現代の生活の、不自然さを

同一視せざるを得ないのを、感じていた。

今、確かに人々は、鈍感で無くては生きては行けない。

たくさんの、自分達には関係ないと位置づけた者達の、犠牲に目を、

つづらなければ。

迂闊にそれを考えたりしたら、今自分達のしている事が、この文明が、犠牲と成る者達にとって、どれ程残酷かを、思い知るだろう。

…自分は鬼だと、思っただけ生きていくのは、辛い事で、自分達をこの文明を、肯定し続け犠牲となる者達の声に、耳を房がなければ……。

楽しい人生など、陽炎に成ってしまう……。

僕はラストイに掛ける言葉を、失った。

自分がふいに、とても惨めに、思えたからだ。

自分の生に誇りが持てない事程、惨めな人生は、無い。

この文明の利を享受した途端、とても惨めで誇れない人生を続けるしかない絶望は……。

確かに、絶えられない苦痛のように、僕には感じられた。

ラストイは、顔を上げた。

「僕はそう、言っていない。

不思議だね。君が僕の話で、そんな風に感じるだなんて」

今度は僕が、少し俯いた。

「…多くの偽善者や、自分を惨めだと思いたく無い連中は、ミュールを神に、したくないと思う…。

自分を惨めにしたくないから…。ミュールは悪魔だと、思いたいんだ。

けれど誰でも、自分の魂には、嘘を付けない。

魂は、何が偉大で何が嘘か、ちゃんと、知っている。

結局……。

自分を惨めにするミュールを悪魔呼ばわりしたって……。

最終的に敵に回すのは、自分なんだ。
そしてミュールを神だと思った途端、自分がどれだけ惨めで間違った生き方を、しているのかを、思い知る」

ラストイは、微笑んでいた。

「僕の話だけで君はミュールを、そこ迄位置づけるのかい？」

たいした感応力だ」

「……………」

だって僕なら、地球のコアに向かうそんな凄まじいエネルギーに決して身を投げたり、しない。

足がすくんで、逃げ出したくなる。

だって……………」

自分が、可愛いだろう？

人よりも。世界よりも。

普通は」

ラストイは、大丈夫だ。と、僕を安心させるように、微笑んだ。

「…そこに踏み込む勇氣を持つ者がいれば…」

その意味が、解る…」

自分が、本当に可愛いのは、どういう事か」

「自分を滅ぼす、エネルギーに飛び込む事が…」

本当に、自分が、可愛い事に、成るのかい？」

僕が、そつと聞くと、ラストイは頷いた。

「…だってミュールは結局、誰よりも、幸せだった…」

誰よりも、満ち足りていた。

たとえ、指一本動かせなくても。

…つまり……………」

自分を、誇りに、思えたから。

自分の、果たすべき役割を、やり切ったから。

それが、一番幸せな事なんだと、彼は理屈で無く、

我々に体感させた」

僕は、ラストイをじつと、見つめた。

見つめ続けた。

…その、週末で、終いだった。

僕がラストイの、あの印象的な、明るい空色の瞳を見る事が、出来たのは……………」

僕は次の週末、やはりコテージで、彼の到着を、待った。
連絡もした。幾度も。

けれども彼は、綺麗に姿を…。

その気配をこの世界から、消した…………。

僕は、主を待ち続ける犬のような気持ちでそれでも…。

コテージに週末、足を運び続け…。

彼を、待ち続けた。

彼の話反復して心に刻み…。

その時の彼の語る表情を、思い起こした。

時々、やり切れなくなる程、孤独を感じた。

まるで…何か、素晴らしい切れ端からも、閉め出されたような、気分だった。

その時僕はようやく、気づいた。

彼は、僕にとつても糸口だった。

今…………。いや、この先かもしれない。

その時代に僕は、存在していないかも、しれない…。

だがこのやり切れない現実から抜け出せる、たった一つの、糸口…。

僕はそれを、“希望”と呼ぶことすら、ためらった。

“希望”と呼んでしまったら…………。

彼を失った僕には、“絶望”しか、残されてない事に、気づくのが、怖かった…。

何度か、もつと人生を、楽しもうと考えた。

女性へのときめき。

男達と興じるゲーム。

高揚感。ちよつとした優越感。仲間意識…。

だがふいに、自分がよそ者のように感じる。

途端、肩を抱き合い、共に歌いはしゃぐ仲間と、距離を感じる。
寒々と…………していた。

僕は、気づいていた。

そして…気づかないふりをしていると…気づかされた。

鈍くなくては、いけない。

真実から、必死で…それこそ必死で、目を、背けなければ。

世界の反対側で、どれ程の人間が虐殺されていようと…。

自分とは、無関係だと、思い続けなければ。

それは確かに地球上で起こっている事だけでも…。

自分とは、関係ない世界で、起きている事だと、納得させなければ
……。

だって、僕はちっぽけで、何の、力もなく、彼らの為に何一つ…。
出来やしないから………。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9504f/>

Memory of Haruka or the far past

2010年10月9日11時56分発行